
チャック全開ですよ

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チャック全開ですよ

【Nコード】

N4875X

【作者名】

雨月

【あらすじ】

憧れの生徒会長に告白し、成功をおさめた新戸風太郎。しかし、その日の放課後、クラスのアイドルに告白されうやむやな関係になる。彼は無事に高校生活を送れるのだろうか。

第一話：人生の分岐点

第一話

俺、新戸風太郎は中学生の頃から一学年上の先輩の事が好きだった。しかし、恥じらう乙女のごとき心境でなかなか告白できず、気が付いてみれば高校二年生。先輩を追っかけて入った高校の入学式では先輩は既に生徒会長をやっており、先輩にあこがれている男子生徒は掃いて捨てるほどいた。

俺が二年になったと言う事は先輩が留年でもしない限り三年生になり、時期卒業するのだ。先輩が留年する事もなく、四月の二週目の昼休みとなった。

「おい、顔色悪いぜ？」

「……これから人生の分岐点に行つて来るだけだ」

俺はとうとう先輩を校舎裏に呼び出して告白した。そこらのへたれとは違うのだ。

「そうか、新戸は私の事が好きだったんだな……うん、いいぞ」

先輩と俺のめくるめくバラ色の高校生活が始まるのだとその時は信じて疑わなかった。もちろん、すれ違いや些細なことでの喧嘩、仲良くなる下校時の出来事等、酸いも甘いも体験していくんだろうなと思つていたその矢先、正確に言うなら先輩に告白してオーケーしてもらつたその日の放課後の事だった。

自分の下駄箱の中に都市伝説が何かと思われていたラブレターなるものが入っていたのである。内容は俺の事が入学時から気になっていた事、今日の放課後に裏庭に来てほしい事が書かれていた。きつとこれは知り合いの悪戯であろう、そう思つて俺は無視するこ

とに決めた。だが、何故かクラスメートが俺の前に立ちふさがる。

「おいおい、帰っちゃうと大変なことになるぞ」

「どうせお前が書いたんだろうが。俺にはお見通しなんだよ……こんな繊細で乙女っぽい字はお前か、クラスのアイドルの中原美奈子さんだけだ」

「そう、中原美奈子さんからのお手紙だ。いけ、行ってお前の幸せを掴んでくるんだっ」

熱血入った声でそう言われて俺は裏庭まで連行されていった。

無理やり押され、俺は下を向いて待つていた中原美奈子さんの前にふらつきながら登場。彼女は俺を見ると初めて見るような照れた仕草をしていた。普段は物事をはっきり言うような委員長タイプな人だけだな。

「ご、ごめんね、いきなりあんな手紙出しちゃって…迷惑だったよね？」

生徒会長に告白をし、見事玉砕していたのならひざまずいて『ありがとう、あなたこそ私のメシアです』とのたまっていた事だろうか。

「ちょっとだけ…めいわ…」

「ごめん、本当……」

すっごく暗い表情に早変わり。なんだか罪悪感で胸がいつぱいになった。

「あー、いやいや。その、さ、ほら、俺って帰宅部じゃん？だから急いで帰ろうかなあって思った時に靴の上に手紙が置いてあったから一生一度もらえるかどうかもわからないような手紙がくしゃくしゃになっちゃうかもしれないって意味で迷惑って言ったの。うん、直接渡してくれればよかったかなー、なんてね…あ、あははは…自分で何言っているのかわからないやー」

「そっか、よかったあ…」

心の底からよかったあという表情を見せてくれている。

「そ、それでね、その、手紙に書いていたんだけど…あたし、新戸

君の事が好きなんだ」

「え、あ、あ、そうなんだ。はは、もらった喜びで頭がいっぱいでよく読んでなかったよ……具体的にはどういう事が書いていたのかなあ」

「単刀直入に言うね、あたしと付き合って欲しいの」

この問いかけにうんとか応えると何だかすごく大変なことになる気がするのだ。いや、気がするんじゃないかってこれは二股と言う奴だろう。ばれたら大変どころか、想像に絶する事が起こるに違いない。当然と言うか、断るしかないだろう。

「ごめ……」

「駄目なの？」

「俺にはか……」

ぶわつと目に涙がすごい勢いで溜まって行く。去年、他校の不良生徒数人を相手取ってなお説教をし、勝利をつかみ取った女の子が一切見せなかった涙を初めて見てしまった。

「俺には力……ンボジア帰りのおじさんの相手をしないから今日はちよつと急いで帰らないといけないんだ……すごく、ありがたい申し出なんだけど、その……嬉しいけど恥ずかしいからさ、友達からじゃ駄目かな？」

「そう、だよな。うん、いきなり付き合ってくださいとかおかしいもんね。うん、新戸君がそのほうがいいって言うのならそれでいいよ。驚かしちゃってごめんね」

「はは、いいよいいよ。俺もなんだか混乱しちゃって変な事を口走ってごめんね」

これなら俺は二股かけたことにはならず、世間的にも言って恋人と親しい友人が出来たと言うだけだ。

しかし、問題が一つある。俺に告白してきた女の子は中原美奈子。俺が告白した生徒会長の名前は加賀美美奈子なのだ。ま、まあ、恋人と友達だしな。ニュアンスを間違えたりはしないだろう。

こうして俺の高校二年生は少し雲行き怪しく始まったのだった。

第二話：愛の詰まったお弁当

第二話

澄み切った青空はきつと青春を謳歌している連中の為にあるんだろ。憧れの先輩に告白し、彼氏彼女な関係となった俺だってその青春を謳歌している人間の種類に入るんじゃないだろうか。告白した、された次の日というのはもつと晴れやかでもいいと思うんだけどな。

「っはあゝ……」

「おい、新戸くそつちにボールがいったぞー」

飛んできた言葉も右から左に抜けて行って俺の心は全く晴れない。たとえ、視界に白球が入ってきててもそれは俺を素通り……

「いたっ……」

することもなく、俺は鼻っ面に当たった白球で見事に転倒した。転倒するはずがないって？がけつぷちで小学生のタックルを不意打ちで喰らってみればいいさ。

「やつりー、新戸のエラーだねっ」

「てめえ、なんでお前がここにいるんだよっ」

四月の体育、ソフトボール。先ほどの白球はどうやらクラスメートの田畑焰の放ったボールだったらしい。俺の名前も大概変だと言われるが、焰ヒヤヒヤなんて名前つける親の顔が見てみたい。

「いいじゃないの、ソフト。みんなでやったらなお楽しいよ」

バットを乱暴に振り回しながら素人くさいスイングを続ける。ランニングホームランとなったようでイライラした俺は田畑に向かってボールを投げてやった。

かきーん……ごすっ。

「……………」

「あ、ご、ごめーん。わざとじゃないんだよ」

悪い事はしちゃ駄目だね、しちゃったら後でひどい事が怒るんだよ…ぐすん。

そんなこんなでお昼休み。お腹の減った高校生にはこの時間が一番うれしいもので早速お弁当を取り出そうとするも、無い。

「新戸君、どうしたのですか？」

坊ちゃん刈りにぐるぐる眼鏡のクラスメートが話しかけてくる。

俺としては生徒Aでも構わんが、名前は中州秀作という。それなりに頭がよく、それなりに人が良く、運動が出来ないが彼女（モニタ）から出てきてくれないのが悩みらしい）がいる少年である。

「俺の弁当が無いんだよ。もしかして中州が食べたのか？」

「食べるわけありませんよ」

「そっだよなあ…」

購買には今から行ってもパンとか残ってないし、外のコンビニに買いに行くには外出許可申請とか面倒な事をしないといけないし…どうしたもんだらうか。

「あれ、どうしたの？」

そんな時、中原美奈子さんが俺に声をかけてくれたのだった。

「新戸君のお弁当が消えたらしいのです」

「そっか、大変だね」

「うん、大変だ。しょうがないから中州達からちよつとずつおかずをもらってしのごうかなあって思ってるところだよ」

「はい、これ」

凹んでいた俺に差し出されたのは可愛いハンカチーフで包まれた俺にとっては小さなお弁当箱だった。

「えーと、これは？」

「お弁当だよつ。新戸君、ううん、風太郎君の為に作ってきたんだよ。こんな言い方したら悪いけどお弁当が無いのなら食べてもらえ

るよね」

「そりやもう、心の底から感謝するよ」

もしかしてこの娘っ子は俺の事を好きなんじゃなかるうか……いや、そういや昨日告白されたばかりだったな。

ともかく、俺は急場をしのぐ事が出来たと言っわけだ。感謝感謝、中原さんには足を向けて寝れないな。

「本当は二人で食べたいんだけどこの後用事があるからごめんね」

「ああ、いや気にしないでいいよ。弁当ありがとう」

さっそうと出ていった中原さんを拝みながら俺は弁当のかわいらしい包みを広げる。

「ははあ、まさか二人がそういう関係だったとは……でも新戸君、昨日生徒会長を呼び出していませんでしたか？って、結果はわかりきってますね。ごめんなさい」

勝手に勘違いしてくれた中州のことなんて放っておくことにした。別に友達から弁当をもらったただけだ、なんら問題はない。たとえそれが手作り弁当だったとしても、ご飯にハートが作られていたとしてもだ。

「おお、新戸よかったじゃないか」

田畑がこっちに机をくつつけてくるのを足で妨害しながら反論する。

「俺の弁当が無いから仕方がないだろう」

「そっかそっか、うんうん…ほほえましいなあ」

あははと笑う田畑にこっちは心の中で色々と苦しんでるんだぞと言ってやりたかった。しかし、俺の弁当箱はどこに行っってしまったんだろう。

第三話：嵌められた風太郎

第三話

四月ももう終わりの最後の週、木曜日。放課後になって放送が鳴りだした。

『ピンポンパーンポーン……二年A組新戸風太郎、至急生徒会室前まで来なさい……ピンポンパーンポーン』

何故か『ピンポンパーンポーン』の部分が生徒会長の声だった。気がするまい。

「新戸、今度は何したの？」

「おい、やめろよ。それじゃ俺がいつも何かしでかしているようじゃないか」

「実際そうだと思うけどなあ」

「一年生の時は学期中に一度は大きな事件を起こしていましたよ」

「そ、そうだったか？忘れちまったなあ……ともかく、行って来る」

これ以上此処にいても過去の傷をいじられるだけだろうからな。

恋人らしいことなんて先輩とはほとんど何もしていないし、甘い期待なんて持たずに行つたほうがよさそうだな。そりゃあ、生徒会室での密会（既に全校生徒に知れ渡っているが）なんてすばらしい話だけだな。

「実はな、女子生徒からの報告があつて二階の渡り廊下の通風孔奥から異音が聞こえているそうだ。これから私と新戸で調べに行こうと思う」

「了解しました」

ま、やっぱりこういふ事になるんだろうな。

渡り廊下は旧校舎とつながっており、人もそれなりに通る。通風孔は人が四つん這いになれば何とか通れるほどの大きさでいたずら防止のために特殊なネジで固定されているのだ。

やたら手慣れた手つきでネジを外し、自ら先に入りこむ。

「新戸、続けてきてくれ」

「わかりました」

こうやって先輩と一緒に何かの作業をしていると中学時代を思い出すな。

「新戸、裏庭の草取りに行こう」

「新戸、花壇に新しい花の種をまこう」

「新戸、職員室の掃除を頼まれた」

おかげで俺は先輩が卒業した後生徒会長に任命されましたけどね。夕焼け、それなりの暗さの通風孔。じめじめとしたようなことはなく、手のひら、膝頭には少しだけ冷たい感じを受けるだけだ。そして、俺の視界いっぱい広がるのは先輩のお尻。役得である。

「ここは他のところにつながっているとは聞いていないから、きつと途中でフィンがあるんだろう」

「そうですね」

「ああ、特に異常が見られなかったら今のままの状態に戻らないといけないからな」

つまり、先輩のお尻が迫り来るなかバックで出ないといけないってことか。それはそれでいいんだけどね。

ぼーっとしていたのが悪かったのか、先輩のお尻に顔をうずめてしまった。

「うわっぶ」

「……行き止まりだ。新戸、壊れたファンがあるくらいだから戻ろう」

「ふえーい」

もうちょい先輩の尻に顔をうずめておけばよかったかなと思いつつ、バックで戻ることにした。光が差し込んでるところまで戻り、

気が付く。

「あれ、閉められちゃってますよ」

「何？本当か？」

「はい」

足で何度か蹴っても開く様子はない。去年、馬鹿力の生徒が此処を開けようと力づくでやっていたようだが、開いたところは見たこともない。

「で、どうしましょうか」

先輩の尻を眺めつつのんきにそういう。先輩に任しておけば大丈夫だろうからな。

「……そうだな、先に進むうか」

さっきは行き止まりだと言っていた。しかし、先輩の事だろうから何か考えがあるのだろう。

先ほどの場所にやってきても今度は先輩のお尻に顔を埋めることなく、先輩が奥の方で立ち上がった。どうやら奥は立てるほどの広さがあるらしい。

「そのまま這って私の両足の間から頭を出し、肩車してくれ」

「わかりました。先輩はどうするんですか？」

「壊れたファンを外して外に出る」

その向こう側は外とつながっているようだ。こういった行動力に惹かれて告白したのもあるからな。ともかく、今は先輩に従っておこう。

先輩の股の部分から顔を出すと言う日常では殆どあり得ないイベントを楽しむ事もなく、俺は先輩を上に乗し上げる。

「届きそうですか？」

「いや、無理だ。これから新戸の肩に足を置いて壁をつたって昇る。私が落ちたら支えてくれ」

こんな狭いところで落ちてきても支えられるんだろうか。でもまあ、先輩が落ちるなんて事は絶対にはずである。

さて、俺らはちよつとした緊急事態に陥っているわけだ。先輩の

両足は今や俺の両肩に乗っている。つまり、俺が九十度上を見ると何が見える状態だと思う？

「ずばり、先輩のパンツが見えるはずだ。」

そして、そんなちよつとエツチな事しても誰にも気づかれることなんてないのだ。だって此処には先輩と俺だけしかないのだから。

「よし、すぐに下を開けてやるからな。」

結局、俺は上を見なかった。そして先輩は昇って行って外に脱出できたようだった。俺もこのまま続いてもいいけどせっかく先輩があけてくれるんだからそつちで待っておけばいいだろう。

先輩が脱出して十分が経過。

「先輩遅いな。」

目の前の鉄格子を揺らしてみるが、効果なし。気分は動物園の猿である。あ、猿は猿山だからゴリラあたりだろうか？

「あれ、新戸何してるの？」

そんな時、俺の目の前に田畑がやってきた。シュノーケルにランドセル、おまるを片手に持っていると言う違和感ありまくり…しかし、突っ込んでいる場合でもない。

「田畑：いい所に来たな。ちよつとこれ使って俺を助けてくれよ」
中から届かない為、工具があっても意味がない。俺はそれを外に放り出した。

「えー、どうしよつかない。」

そして工具を手にとってにやにやとした笑みを浮かべる田畑。気のせいか、手に持っているおまるの面もそれに似ているようだった。

「頼む」

「へえ、それが人に物を頼む態度なのかなあ？」

くっ、相変わらず嫌な性格してやがる。

「お願いします」

「助けてあげたら何してくれるの？」

「な、何か一つ言う事聞いてやるよ」

「そっかそっか、それはいい事を聞いたよ」

数分後、田畑に助け出してもらって俺は何とか脱出する事が出来たのだった。

「いやー、今度の日曜日が楽しみだよ。朝から晩までスケジュール白紙にしておいてよ」

そっいいながら田畑は去って行き、今度の日曜日はばっくれてやるうかと思ったりする。

「しかし、先輩はどこに行っちゃったんだ？」

仮にも俺って先輩の彼氏なのに……ここまで助けに来るのが遅いなんて何かあったのだろうか。

「……ともかく携帯も鞆の中だし教室に戻ってみるか」

「新戸」

先輩の声が聞こえてきた。珍しく焦っているようだ。

「あ、先輩」

「悪い、いいわけだが生徒につかまってしまっただけでなかなか開放してもらえなかったんだ」

「いいですよ。こっちは何とかかりましたから」

「それで、今度の日曜日償いをさせてもらいたいんだがどうだ？」

「あ、すみません。その日ちょっと友達と用事があるんで無理です」

「そ、そうか」

まるで神様が俺と先輩の中を引き裂こうとしているかのように予定が合わなかった。結局、先輩はその後もう事があったようで俺は一人空しく帰路についた。

第四話：妹分、愛夏

第四話

田畑焰と約束した日曜日の朝。携帯電話が鳴りだしたので寝ぼけ眼で探して耳に当てる。寝起きの悪い俺としては実にすばらしい反応である。

「……………もしもし？」

『おつはよー、昨日はよく眠れたかな？』

「……………ぐつすりだよ、お前に起こされて不機嫌だ」

『そっかそっかー、じゃあ十一時にデパート前集合ね。じゃあね〜』
一方的に電話は切られ（いや、別に長電話したいわけでもないが）、俺は身体を起こす。

「……………せつかくの休日、例えば先輩から誘われたと言っのにこっちを優先してしまうなんて俺はなんて律儀な人間なんだろうか」

某青狸の『半分小刀』があれば両方に行けたんだけどなあ〜テクノロジーの進歩と言う奴はローマの一步みたいでまだまだ先のようなのである。

自室から出て顔を洗い、一階へと降りる。テクノロジーの進歩があれば階段も自動になって…いや、瞬間移動でいけるか。

「風太郎、愛夏ちゃんが来てるわよ」

「おはよっ、兄貴」

リビングには母さんと親戚の愛夏がいた。休日だと言っのに愛夏は制服姿である。新戸愛夏、結構遠い親せきにあたるんだが、幼少のころから住んでいる地域が同じなために小、中、そして高校共に一緒である。兄弟のいない俺の妹分だ。ちなみに、子分とかそんな感じではなく妹分（貴重な俺の妹成分）である。意味がわからない？つまりは心のよりどころみたいなもんだ。

「あれ、今日は休みだろ？」

「うん、そうだけど兄貴に制服姿を見せたかったんだよ」

じゃーんとか言ってくるりと一回転。スカートがひらひらなつて可愛い。さすが俺の妹分である。

「制服姿って、入学式と一緒に写真撮っただろ？」

「違うよ、同じ学校なのに兄貴が会いに来てくれないからしっかり見てもらうために来たんだよ。なんで会いに来てくれないの？」

「そりゃまあ、用事もないのに一年の教室には行けないだろ」

えー、ちゃんと愛夏に会うためって言う用事があるじゃん……なんて言われる前に俺は口を開く。

「お前が会いに来ればいいじゃないか」

「あ、そうか」

来てもらっても困るんだけどな。おもちゃを見つけたら絶対に喜ぶような奴が約一名、俺の近くにいる。ともかく、この場をやり過ぎせたからよしとしよう。

「母さんちよつと買い物に行つて来るから」

「いつてらつしやーい」

「母さん、シャンプーと歯磨き粉が無くなりそうだからよろしく」

二人で母さんを見送つて俺は席に着く。

「朝まだだよね？」

「ああ」

「何か作つてあげようか？」

「頼むよ」

「りょーかい」

台所に立つ愛夏を尻目に俺はテレビのスイッチを入れる。

「そつえばさ、兄貴……とうとう加賀美生徒会長に告白して、しかも成功したんだよね？」

「ああ、何とかな」

「よかつたじゃん。妹分の愛夏としてはふられるほつに賭けてたんだけど残念だったよ」

「そこは嘘でもいいから成功する方に賭けてくれよ」

偉い政治家さん達が色々と議論している。俺からしてみればどう

せどつかと癒着とかしてるんだろつと思うが、自分がもしも政治家になれた時に癒着とかを話題に持って来られるとテレビの中の政治家と同じで文句を言う事間違いないだろう。

「でもなあ、ちよつと問題があるんだ」

「どうかしたの？」

「告白したその日に中原美奈子つて言うクラスメートに告白された」
「当然断つたんだよね？」

「そうだよ、世間一般的に言つて普通ははつきりと断るだろう。」

「あゝ……… 適当に『友達からお願ひします』つてうやむやにしておいた」

「がたん、という音が聞こえてきて俺の目の前に裏返された目玉焼きが綺麗に着地した。まあ、黄なみがつぶれちゃったけどな。」

「愛夏、いつの間にかこんなにごいスキルを身に付けたんだな。」

「お兄ちゃん、感心しちゃつたわあゝ」

「血相変えた愛夏がこけそうになりながら俺の視界に入ってくる。」

「あ、兄貴つ、それはまずいと思うよつ」

「エプロン姿が可愛い愛夏が俺の前の席に座つて失敗した目玉焼きを片づけた。」

「……… やつぱりまずいか？」

「そりゃそうだよつ……… ばれたりしてないよね？」

「大丈夫だ。どっちにもばれたりしてないから」

「しばらく愛夏は考えているようだった。」

「どうするの？」

「どうするつて、いや、どうにもできないから愛夏に相談してみたんだ」

「兄貴つてば変な事をよく引き起こすよねえ。去年は下着泥棒に間違えられて女子から総スカン喰らつたんだつて？」

「あれは冤罪だけだな。後日ちゃんと謝つてもらつたぞ」

「愛夏は未だ考えているようだった。」

「もつ、あれだよ。どうせ加賀美生徒会長も兄貴の事を知り合いだ」

から断つたら関係悪化しちゃうそうだし、仕方なく付き合っただけ
てるのかもよ」

「そ、そうかなあ」

「うーん、でも、そのクラスメートの中原美奈子って人もこれと言
って取り柄のない兄貴に魅力を感じてるのかなあ……」

「おいおい、取り柄のないって……」

「じゃあどんな感じで告白されたの？」

愛夏に言われて思い出そうと頑張ってみる。

「好きだから付き合っただけってほしって感じかなあ……」

「怪しい……もしかしたら兄貴の遺産が目当てなのかも」

「俺の家は別に裕福でもないだろ」

「いや、もしかしたら兄貴に秘めたる能力があってそれが目的で……」

「はいはい、愛夏、さっさと朝食作ってくれよ」

「はい」

いまいち真面目にやってくれないのは俺の性格が似てしまったか
らだろうか。

「でもさあ、どうするの？」

「どうするのって、そりゃやっぱ先輩優先だろ。いつかちゃんと
言わないといけないことだ」

セリフだけだと格好いいけどやってる事は最低だよねえと言われ
た。確かにそうだけども、優柔不断な自分が悲しいぜ。

「兄貴がそれでいいって言うのなら愛夏も何か手伝うよ」

「おう、その時はよろしく頼む」

これまで困った時に愛夏が助けてくれると大抵失敗に終わる。し
かし、くじけてはいけない。数多くの失敗を乗り越えて成功と言っ
たものは顔を出してくれるのである。

第五話：田畑との友情

第五話

田畑との待ち合わせ場所に十分前到着完了。

「や、新戸」

「お前にしちゃ早かったな」

「そりゃそうだよ。だって家の前集合に変えたんだからさ」

昼飯を取っているときにメールが来た。『集合場所はあたしの自宅に変更』という内容である。

「しっかし、相変わらずおしゃれさんだな」

「身なりはちゃんとしてないと駄目なんだよ」

Tシャツジーンパンの俺とはだいぶ違う。男っぽい見た目の服装の為に女子に人気の田畑。これは噂だが、男子の中で彼女を盗られた奴がいるとかいないとか……。

「で、俺は何をすればいいんだよ」

「実に簡単なことだよ」

こいつの簡単は九十超えるおばあちゃんが逆立ち町内一周をするぐらいの難易度である。

「さっさと内容言ってくれよ」

「それは着くまでのお楽しみだからね」

あゝあ、どんな事が起こるかもわからないのに安易に助けを求めたのが失敗だったな。あとちょっと待っていれば先輩が助けに来てくれて今頃デートしているはずだったのに。

デパートについて俺と田畑が向かった先は女性用下着売り場。何、田畑だって身なりは男っぽいのが脱がせば女子である。ブラにばんちくは必要だろう。ちなみに俺一人がこの売り場に入ると女性店員から変な顔をされること間違いなし。この前なんてアマチュア作家の人が店員さんに連れて行かれていたからな。

「いや、違うんです。俺は別にそういう目的で来たわけでは……」

小説に使うネタですよ」

あれは可哀想だったな。同じ男として合掌しておいた。

「で、此处で何するんだよ？」

「決まってるよ」

びしつと右手で指差してくる。

「下着を買ってきてもらうんだっ」

「……はあ？あんな、俺が買いに行ったら連行されるぞ」

「そこは大丈夫、ここにあたしがいるからさ」

にこやかにそう言われる。そして親指立てて俺に言うのだった。

「がんばっ」

「ちっ、しょうがねえな」

足取り重く、店員さんに目をつけられない様に手近な下着を手取る。

「上下セットで頼むよ」

「へいへい」

サイズは適当でいいのか？ブラジャーとか付けたことなんて一回もないからわからんぞ。知り合いの中に標準的な人物がいるかどうか……愛夏は胸ないしなあ、先輩は結構あるし、そっいえば俺は女子と一緒に来ているんだからそいつに買えって言われているんだから基準をそいつにすればいいな。

じーっと田畑の方を見る。

「何、どうしたのさ？」

にやにやしているところを見ると俺がなんで田畑の事を見ているのかわかっている節である。

「……すまん、田畑」

「失礼だよ」

「すまん、すまん……」

愛夏と変わらないくらいだった……ええい、こつなったら適当に上下セットで買えばいいはずだ。

男らしくブラジャーを掴み、パンツもついでにあさる。

「あれ、風太郎君？」

どこかで聞いたことあるような声が耳に入ってきた。回らぬ首を無理やり回して声の主を視界にとらえる。

「な、中原さん……」

「……なんで風太郎君がブラジャー驚掴みしてるの？」

「こういう時、変に緊張したりしてはいけない。いつもと同じようにふるまえばいいのだ。」

「田畑に頼まれたんだよ。下着上下セット買ってさ……あれ、いねえ」

「田畑さんに？」

「ああ、諸々あっていわば罰ゲームってやつかな。でも、いなくなつたし戻してもいいだろ……」

「あの～お客様」

「はい？」

遂にきたか……連行されたらどうなるんだろう。

「さすがにそこまで力強く握られたものを返されては困ります」

「え、あ、ああ……すみません。これ、買いますから」

愛想笑いを浮かべながらレジまで持つていく。もちろん、ぱんちも買ったさ。ああ、着用しない女性用下着をそれはもう堂々と買ってやった。

「ママ、なんで男の人なのにぶらじゃー買ってるの？」

「よく見ておきなさい。あれが変態予備軍よ」

もう二度とこのデパートには来れないやと思いつつお金を払う。

それなりに高かった……でもまあ、中原さんが近くにいってくれたおかげで精神的に楽だった。

その後、逃げるようにその場を後にしてデパート内の飲食店に入る。本格的なコーヒーのあのお店である。

「それでその下着どうするの？風太郎君がつけるの？」

「まさか、つけるわけないよ」

「じゃあそれ、あたしにくれなかな？」

愛夏にでも上げようかと思ったが、このサイズじゃちょっと愛夏には大きいしなあ。

「いいよ。あげる」

「お金、払おうか？」

「いや、いい。はいどうぞ」

紙袋を中原さんに渡してため息をつく。

「しっかし、田畑のやるゝどこに行ったんだろ」

「きつと急に用事が出来たんだよ」

「そうかなあ」

「だと思っよ」

本当にそうなんだろうか、でもないんだからその通りなんだろうな。後で聞いておくとしよう。

「この後暇なら一緒にカラオケでも行かない？」

「いいよ」

結局、この後中原さんと休日を過ごしたわけだ。悪くはなかったし、女の子とデートなんてラッキーだなと思ったさ。でもさ、やっぱり先輩とデートしたかった。

第六話：日常風景となった事

第六話

先輩と俺が恋人関係になって一カ月が経った。特に報告するような進展はなく（眼と眼があった、手と手が触れたとかそんなの）、たまに俺が先輩の仕事を手伝うくらいだ。変わった事と言えば夏服との衣替えが始まったのと、中間試験がそろそろ迫ってきているくらいか。

「はい、風太郎君お弁当」

「ああ、ありがとう」

撤回していく中原さんに手を振っていると田畑が顔を近づけてくる。

「日常風景になったねえー」

「そーだな」

最初の頃はちょっと悪いかなど思ったんだけど、最近じゃ何とも思わなくなってきたりする。ちょっとやばいか？いや、別に彼女ってわけじゃないんだし、何かあったと言っわけでもない。

「新戸君、今日の日直ですから早く黒板消してください」

「わかつてるよ。飯食った後じゃないと粉が飛ぶだろ」

「ちゃんと消しておけばよかったです」

中州に文句を言われつつ机をくつつける。

「そーだよ、全部新戸が悪いに違いないっ」

「…お前も一応日直なんだぜ」

「大丈夫、あたしはちゃんと職務を果たしたから」

「はあ？」

「学校に来た、それが日直の仕事」

「……」

こいつに何を言っても無駄だな。

弁当箱を開けようとすると、もうひとつ机を引っ張ってくる人物

がいた。

「あたしもお邪魔します」

「中原さん……」

「一緒に食べようと思ってさ。やっぱり、食べてる人の顔もみたいかなーって思ってた……駄目、かな？」

ちよつとおどおどした感じがいつもと違う。

「中州君っ」

「はい？」

「わたしたちは邪魔だから、別のグループのお世話になろう」

「そうですね」

教室と言う小宇宙の中で作られた宇宙ステーションはあつという間に解体、独立して別の場所へと移って行く。俺は取り残されてしまった。

「ごめんね」

「気にしなくていいって」

「うん、じゃあ気にしない」

俺の真正面に（どうでもいい事だが目の前はいつも田畑）陣取る。ぼーっとしているのもあれなのでお弁当箱を開けた。

「あれ、今日は箸が入ってないよ」

「え？あ、あ……ごめん。忘れちゃったみたい」

中原さんが忘れることなんて珍しい事もあるんだなあ。箸が無いのならちよつと遠いけど食堂まで行けば借りてこられるからな。

「あ、ちよつと待って」

立ち上がった俺の腕を中原さんが掴む。

「どうしたのさ」

「えつとさ……えーつと、この前田畑さんがお弁当忘れてた事あったでしょ？」

「ああ」

約一週間前に田畑はお弁当を忘れ（さらに財布も忘れていた）、俺と中州から昼食を分けてもらったのである。

「あつたな。それがどうかしたのか？」

「うん、風太郎君がお箸で食べさせてあげてたよね、だからあたしが食べさせてあげるよ」

「え、あ、いや……」

一週間前、田畑の奴は弁当のふたの裏におかれたおかずをじーつと見ており、俺に目で何かを訴えていた。

「どうした、それだけあれば充分だろ？」

「うん、じゃあどうやってあたしは食べればいいのか？」

「そりゃ箸借りてくればいいだろ」

「面倒だよ。新戸く食べさせてよ」

「……しょうがねえなあ」

何だか犬に餌をあげている気分になった。

ともかく、あれはもらっている側としてはすごくはすかしいのではないだろうか。

「いや、やっぱり恥ずかしいって」

「でも、あげてるときはまんざらでもない顔をしてたよ？」

「そりゃ、やっている方は何ともないだろ？」

「じゃあ、はい」

手渡されたのは箸だった。

「風太郎君があたしに食べさせてくれればいいんだよ」

「……なるほど」

さすがクラス委員長も務める中原美奈子さんである。その考えにはいたらなかった。

「あれ、いいんだ？」

「ああ、これなら別に恥ずかしくもないからな」

小さい頃は愛夏によくこうやって食べさせてやっていたもんだ。好奇心丸出しで周りが俺達の事を見て来たんだが、そんなにおかしい事をしていただろうか？

「ふう、ごちそうさま」

「御馳走様、弁当にお箸、ありがとう」

「いえいえ、風太郎君に喜んでもらうためにもっとお料理頑張るね」
面と向かってそう言われると恥ずかしい。いや、悪い気はしない
んだけどな。しかし、ずっと弁当を作ってきてもらうのもいけない
だろ。

先輩と俺は恋人で、中原さんとは友達のはずなのにやっている事
はまるで恋人みたいなことである。それとも、世間一般的な友達関
係ってこんな感じなのだろうか。

第七話：広がる事実

第七話

中間テストが始まり、すぐに終わった。それ以上でも以下でもない、勉強しているものはそれなりの点数を手に入れ…

「まずまずです」

「相変わらず安定して満点揃えてるな」

「ええ、努力の賜物です。次回も頑張らなくてはいけません」

勉強もせず、友人を無理やり誘って遊びに行くような愚か者にはそれ相応の点数を授けるいわば通過儀礼…

「ええ〜なんで新戸は一つも真つ赤な点数とってないのっ」

「そりゃまあ、お前と違ってちゃんと勉強しているからな」

「だって、一緒に遊んでたじゃん」

「家に帰ってちゃんと勉強したんだぜ？くくく、まあ、期末で頑張る事だな。じゃないと夏休みは補習漬けだ」

「ぶーっ」

「中州、こいつに勉強を教えてやったのかよ？」

「ええ、ちゃんと教えましたよ」

眼鏡をついつと上げて俺の質問に答える。

「ですが、僕の勉強方法と田畑さんの勉強方法は違ったよう受け入れてもらえなかったのです」

「だって中州君の難しいんだもん」

「こりゃまたとんだ問題児である。一年の頃は隣のクラスだったからこいつの点数は知らなかったけどまさか赤点常習者だったとはな」

「今度は新戸君が教えてあげたらどうですか？」

「ええ〜俺が？」

「ええ、だって田畑さんの友達でしょう？」

「友達じゃない」

「呪ってやる。わたしは残りの人生を全部新戸風太郎の事を呪って

生き抜いてやるっ」

まるで親の仇を見るような感じである。

「でもよあ、俺は中州より頭悪いぜ？」

「いえ、教える程度ですから大丈夫ですよ。こういったものもやはり阿吽の呼吸が無ければいけません。この前のテニスの授業でもいかななく発揮されていたでしょう？」

「どうだか…テニスと勉強は違うと思うけどな」

「ともかく、僕が教えたのだから今度は新戸君が教えてあげてください。友人が夏休みの補習に参加しなくてはいけないのは見ていて辛いですからね」

「じゃあ中州が教えてあげてくださいやいいんじゃないのん？」

「順番ですからお願いします」

「ちえ」

愛夏に勉強を教えるのならともかく、何故に同級生の勉強を見てやらねばいけないのだろうか。期末まで時間があるからいいけど、そろそろ始めないとこいつの場合はまずいんだらうなあ。

とりあえず放課後、中原さんに一緒に帰らないかと言われる前に（最近よく誘われる…部活があるだろうに）図書館に連れ込んだ。

「ちよ、ちよつと新戸、こんな人気のないところに連れ込んでどうする気？」

「くくく、想像に難くないだろう？」

「わ、わたしをむいてあんなことやこんなことを…」

「そうだな、とりあえず返してもらった答案用紙を全部出してもらおうか」

アホに付き合ってやるのは一行だけである。

「日本史は自信あったんだけどね。満点かと思ったんだよ？」
無い胸張ってどんと叩く。

「ああ、そうだな。一問ずつ上にずれていれば合計で九十六点だった」

「でしょー？」

結果論である。最後の文章問題の欄に『一問ずれとは定番ですね、次回は頑張ってください』と先生からの言葉が書かれている。

「落ち着いて解けよ」

「反省してまゝす」

本当にしているのだろうか？俺がこいつの点数を心配してやる義理はないんだけどなあ。

そのあとも悪かった答えは何処か調べ、基本から問題を解かせてみた。

そんな時、加賀美美奈子生徒会長が図書館にやってきた。

「新戸、こんなところで何をしているんだ？」

「見ての通り友達の勉強を見てやってるんです」

「ほお、それはいいことだな」

俺の希望は『先輩、俺と一緒に放課後期末テスト対策しましょう。わからないところ教えてください』で色々と進展するはずなのに現実にはアホとのお勉強会だからな。

「ども、新戸の親友の田畑焔っていいですよ」

解いておくようにと言った問題をやめて俺の隣にやってきていた。そして、自己紹介をして握手を求めている。

「ああ、これは丁寧ありがとう。私はこの高校の生徒会長、加賀美美奈子だ。一応、新戸の彼女でもある」

握手を満足いくまで堪能し、放した後田畑はしきりに驚いていた。そりゃそうだろうな。まさか先輩が初対面の相手に対して『彼女だ』と言つとは思ひもしなかった。

「へえ〜」

「意外か？まあ、私のような女では新戸も物足りないだろうがな」

「そんなことないです」

「ふむ、そうか。おっと、私は用事があるから失礼させてもらおうよ。新戸、また今度だ」

「ええ、がんばってください」

一冊の本を掴んで図書館から出て行った。受付顔パスとかさすが

生徒会長である。

「さ、俺たちは勉強に戻ろうか。それ終わったら今日は終わりだ」

「うん、わかった…ところで新戸」

「何だよ？」

「一緒に帰ろうよ」

「ああ、いいぜ」

どうせこの後部活に行くわけでもない。部活に入っていないのだから。

たった一問の問題を解くのに数十分かった友人をどうしたものかと思案するが答えは出ない。いつそ、家庭教師でもつけたほうが（十人ぐらいいければいいかな？）いいかもしれない。そんな結論が出たところで珍しく黙っていた田畑が話しかけてきた。

「あのさ、新戸」

「何だよ」

「あれってどういうこと？」

「あれ？あれって何だよ？」

「さっきの生徒会長が言っていた事。彼女だつて言ってたけど？」

「あ、ああ、あれか。あのな、実はだ……」

俺はアホでもよくわかるように説明しておいた。

「…つまり、二股かけてるって事だよな？」

「いや、大丈夫のはずだ。まずは友達からお願ひしますって言っているからな」

「……はあ」

「何だよ…その人を馬鹿にしたようなため息は」

夕方でもそれなりに暑く、日もまだ強い。そんな最中、田畑は途中で歩を止めた。車が一台田畑、俺を追い抜いて行く

「どうしたんだよ」

「おんぶ」

「おんぶう？何わけのわからない事を言ってるんだよ。暑さで頭やられたんじゃないのか？」

両手を俺の方へと突きだしている。しかし、ちゃんとおんぶしてしまう自分が悲しい。

「あのさ、新戸。二股してるって事がどちらかにばれたらどうなるかわかってるの?」

後ろからそんな声が聞こえてくる。

「ばれるって、なんでばれるんだよ?まだばれてないぞ」

「わたしのことを適当にあしらったり、のけものにしたら今後ポイントがたまって見事満点になると…なんと…」

ポイントの溜まる方法がまるでマゾみたいである。

「何かもらえるのか?」

「中原さん、そして加賀美生徒会長に二股している事をばらします」
「……」

「新戸、おんぶして」

「してるだろ」

「うん、でも大丈夫だよ」

「何が?」

一呼吸置いてさっきよりも小さい声が聞こえてきた。

「中州君と、わたしは多分、そんな人類の屑みたいな新戸と友達でいてあげるからさ」

「そりやどうも……しっかし、お前重いなあ〜いたっ」

「そりやそうだよ。だって二人分の鞆持ってるんだから」

「あーはいはい、そうね、だから重いのね」

田畑が中原さんにぼろっところぼろっところ確率九十パー超え。辞世の句でも考えたほうがいいんじゃないかと真剣に悩んでいる俺…これが青春なんだろうか?それに、悩む事はまだあって先輩の誕生日も近いのだ。

第七話・広がる事実（後書き）

どうも作者の両月です。長期連載をする予定は今のところありませんので適当に読んでもらうのがいいかもしれません。今回の報告は以上です。

第八話：プール掃除

第八話

五月はこれといって特徴的な事もなく（いや、田畑に二股つぼく
なっていることがばれたが）、六月。

梅雨時、しかしながら体育は水泳も入ってくるわけでプールの掃
除があったりするわけだ。我が羽津高校では生徒会がプール掃除を
行うのが伝統だかなんだかで、俺も呼ばれていたりする。

「手伝わせてしまつてすまない」

「いえ、別にいいですよ」

何せ、プール掃除を制服でするわけではないからな。うん、スク
ール水着とはいえ、水着である。しかも、今年の生徒会は『女の園』
と呼ばれているぐらいで男子生徒は入っていないのだ。

「ふむ、そうか」

「新戸君も喜んでいるようですし、手伝ってもらいましよ会長」
加賀美生徒会長と双璧を成すと言われる浅野副生徒会長。眼鏡で、
長髪にバンド、脱いだらすごいと何故だか知れ渡っている人である。
しかも…

「新戸君、ご褒美ですよ」

素晴らしい絶景を見させてくれるように胸を協調させるようなポ
ーズをとってくれる。まあ、サービスピ精神旺盛なのだ。

しかし、しかし…あれだ。隣は生徒会長なのだ。俺が現をぬかし
て居たら怒ったりするんじゃないだろうか？

「あれ、やっぱり彼女さんからしてもらったほうがいいのかな？普
通だったらだらしのない表情見せてくれるんだけど…顔色うかがって
いるようじゃ駄目ね」

「あゝ……はは」

先輩の方を見るけど特に何とも思っていないようだった。ちょっ
とばかり、さびしかつたりする。

「会長」

「何だ？」

「いつも公私ともに新戸君に手伝わってもらっていますよね？」

「ああ、そうだ。そうだな、新戸？」

「え？ええ……」

「いわば先輩の第三の腕と言ったところだろうか？いや、会長の下僕と言ってもいいかもしれない。」

「お礼とかしてないんですか？」

「失礼だな。ちゃんと手伝わってもらったら『ありがとう』と言っているぞ」

胸を張って先輩は仁王立ちしている。手を合わせておいた。

「いや、そうじゃなくて……」

「しばらく悩んでいた副生徒会長は浅野生徒会長は俺に近寄ってくる。」

「な、何ですか……よからぬ事を考えている目をしてますけど」

「後ずさり逃げられる距離にも限界があり、かかると何か当たったところで終わってしまう。俺の顎に手を這わせ、胸を押しつけ、足を絡めてくる。」

「新戸君、いつもありがとう……キスしてあげるね」

「え、ええ……」

「いや、冗談だと言っただけだ。ほら、やっぱり男って心の奥底で『いけるかも、いけるかもしれない』って思うときあるじゃん？人前ってわかっていてもやっぱり期待しちゃっただよ」

「そういえば、先輩も近くにいたんだっけか。」

「先輩のいる方へと視線を動かすが浅野先輩も身体を動かして見えない様になっていた。」

「あら、やっぱり彼女の方が気になるの？でもね、今日に映っているのは私だけでしょ？違うかな？」

「ち、違いますっ」

「じゃあ、目を閉じて」

「……はひい」

言われるままに目を閉じる俺。きっと飴ちゃんあげるからと言われただけでほいほいと暗がりに入れて行かれてしまふのだから。

そう、俺一人だけなら確実に連れて行かれるだろうな…残念、先輩が近くに居るのだ。

「そこまでだ、そういうのはよくないぞ」

副生徒会長の後頭部を引っ張って俺を解放する。

「大丈夫か？」

「え、ええまあ」

ちよつと惜しいかと思いつつ、そういった甘い考えが中原美奈子との間柄を未だ解消できていない要因なのだと冷静に分析してみる。「大丈夫って、別に何もしてませんよ。ちよつとちゆうしようって思っただけです」

「校内では禁止されているだろう」

「ちよーつとぐらいいいじゃないですか」

「駄目だ。絶対に新戸には手を出すな」

「へえ〜会長がそんな事を言うのは珍しいですね〜」

「当り前だ、新戸は私の彼氏だからな」

胸を張って言うてくれる先輩が神様に見えた。気のせいか、後光まで見えたりする。

「じゃあ会長のいただきますっ」

「む、むぐぐ……」

何と、あるうことが目の前で先輩の唇が副生徒会長に奪われてしまった。そのまま先輩はぺたんと尻もちをついて副生徒会長に押し倒され……

「ぷつつはあ〜……御馳走様でした」

「お、女の子同士で……」

ゆらりと立ち上がる副生徒会長。先輩は放心状態で青空を眺めていた。ファーストキッスが奪われたわけだが、なんだか微妙な心境である。

「さて、次は新戸君の初めてをもらっちゃおうかなあ？」

先輩を心配している場合ではなかった。口元を歪め、両手を顔の横でいやらしく動かしている。

「こ、このままここにいると……やられるっ……いや、むしろ掘られるかもしれん。」

「待てええ〜」

「ひひひひ〜っ」

デッキブラシを振り回しながら追いかけてくる副生徒会長。俺は他の生徒会員を間を抜けたりして逃げ回った。

その後、復活した生徒会長に仲良くゲンコをもらって説教され、大人しく掃除を終えたりする。最後の後片付けは俺と先輩で終わらせ、プールサイドでちよつと話をすることにした。

「ふいー、疲れましたね」

ふいー、副生徒会長につかまって突かれなくてよかったわ、いや、まじで。

「新戸」

「はい？」

「その、色々とすまない」

「…ああ、副生徒会長の事ですか。いいですよ、それなりに楽しかったですし」

「いや、これまでのお礼の事だ」

「お礼…ですか？」

「そうだ。言葉だけで事足りると思っていたのは長い付き合いだから」

「らかもしれない」

「副生徒会長の言っていた事を気にしているですか？俺は別に気にしていませんけど」

むしる先輩の方があんな人前で押し倒されて濃厚なキッスされるとか精神的にくるんじゃないだろうか？考えてみてほしい…同性にいきなり押し倒されて唇を奪われるとか二度と校門をまたぐ事はないだろう。

「お礼をしたいと思う」

「お礼ですか？」

「ああ、浅野がお礼だと言っていた事をしようと思うんだ」

「え、えーと…」

もしかしてキス…いや、そうに違いない。

期待した目で先輩を見たけど、両手を振りたくって顔で思いつきり否定していた。

「違うぞっ、ポーズの方だ」

「ポーズ…ですか？」

「あ、ああ…ほら、男子はそういったポーズをとってもらうのが好きなようだからな。よく浅野は男子生徒の前でポーズをとっている。新戸はどんなポーズをしてもらいたいんだ？」

いきなりそう言われたって困る。いや、キスの心の準備をしているのにそれは困る。まあ、そんな事だろうとは思ってたさ。うん、先輩が俺に悩殺ポーズをとってくれるなんて今後あり得ないだろうからな。

でも、品行方正な先輩がポーズをとったところできこちない感じで（それはそれでいいけどさ）俺の方が申し訳なくなっちまうよ。「…気持ちだけで十分です。じゃ、俺は帰りますんで…お疲れさまでした」

浅野副生徒会長のポーズはマジですごかった。背筋をぴんと張らせるような感じだったし、猫背も一発で直るぐらいの凄さだったのである。あれを見た後ではどれも駄目に見えてしまっただろう。

帰ろうとした俺の腕を先輩が掴んでいた。抱きつくような感じで。「待ってくれっ、つまり新戸は私に女としての魅力がないと言いたいんだな？」

「いや、そうとは言ってませんよ。十分すぎますって」
殺傷能力を持っていそうな胸とかな。ま、それとこれとは話が別だ。

「気が済まないからお願いだ、何か指示してくれ」

「……わかりました。でもどんなに恥ずかしいポーズでやってくださいよ？」

「ああ、もちろんだ。絶対に成し遂げて見せる」

少々、心苦しいが此処まできたら手加減と言う奴は逆に失礼である。俺は先輩の身体を触りながら指定したポーズをすぐに完成させた。

「こ、こうか？」

「そう、そうです。多分、先輩のそのポーズを見る事が出来るのは彼氏である俺ぐらいなものですよ。みた人を釘づけにします」

品行方正な先輩がまさか『シエー』のポーズをするわけがない。

先輩が二度とシエーをすることもないだろう。

俺は先輩の恥ずかしいポーズをしっかりと目に焼き付けておいた。

第九話：波乱の回避

第九話

今ではかなりの数が普及された携帯電話。中学生だつて持っているし、小学生の中にも所有している子もいる。もちろん、高校生の俺も持っているし、大抵の生徒が持つており、学校に持つてきているだろう。

ただまあ、前提と言うか、『教師の見ている前では使用してはいけない』、『使用が許されている場所だけの使用』といったものが決められている。通話がしている場所は職員室を抜けたベランダ、屋上（立ち入り禁止となつてゐる）の二か所だけだ。

ルールが守られなかつたらどうなるか？決まつてゐる…罰を受けるのだ。

「新戸、生徒会室では使用厳禁だ」

「え」

「没収だ。反省文を書いてこい」

たとえ知り合いと言えど、彼氏と言えど、手加減するつもりは毛ほどもなかつたようで俺から携帯電話を取り上げた。ちよつと気を許しすぎたかもしれないと思つて大人しく引き下がり、反省文を書く為に紙をもらつたわけだ。

「私の彼氏だからな。一枚増やしてやろう」

「……ありがとうございます」

全く、嬉しくない。

六月の中盤、俺は携帯電話を数日間使用不可にされたわけだ。使用不可にされた事に腹を立て、親が学校に乗り込んでくるとか冗談にも程がある。

「それは風太郎が悪いんでしょ？はやく反省文を書きなさい」

「へーい」

夕食時でも母ちゃんにそう言われた。そりゃそうだろう、学校の

事に親が関わってくるなんて後ろ指さされるレベルである。モンスターパーアレンツの友人なんて誰ももちたくないだろうからなあ……中学の頃そうだった奴がいたけど、もの見事に隔離されてたな。

家で反省文を書くが、書き終わらずに学校で書くことにした。

「……まあ、特にメールとか送ってくる奴がいるわけでもないか」

ここ最近、電話もメールも母ちゃんからが多い。先輩とは恋人のはずだが、携帯での関係は必要事項のみという何とも素っ気ないものだったりする。一応、先輩にも言い分はあるようで『気持ち伝わらないだろう』との事である。

朝のHRが始まるまでに書き終えようとするも、埋まらない。

「新戸おっはよ〜」

「おはよう」

元気の塊みみたいな奴が入ってきた。反省文を指差しながら薄っぺらい鞆を自分の机の上に放り投げてこっちに近寄ってくる。

「あれ、ケータイ取り上げられたんだ？」

「ああ、先輩にな」

「先輩……生徒会長さんかあ。相手が新戸と言えど、手加減しないんだねえ……でも当然か」

「なんで当然なんだよ？」

「やっぱりきつちりして欲しいと思うよ。新戸なら尚更ね」

「……そうかもなあ、ちよつと気が緩んでたわ」

「で、どんな事書いてるの？見せて見せてっ」

「ほら」

使用した事を素直に悪いと認めた文章が続いているだけである。受理されなかった場合はボランティア活動に参加せねばならない為に一発で合格を目指さなくてはいけないのだ。別に活動に参加してもいいけどな。

「面白くないね」

「反省文が面白かったら問題だろ」

「うーん、そうだね。でもこう書いておくといいよ……ほら、こん

な感じ」

しよつちゆう取り上げられていそうなイメージがある為に反省文は自信あるんだろうかと見せてもらった。

「……『社会が悪い』って絶対に駄目だろ」

「そうかなあ、学校が悪い、ひいては生徒会長が悪いんだって言えば嫌われるだろうし」

「嫌われちゃ駄目だろっ」

「いいじゃん。二人もいるんだからさく、一人ぐらい失っても」

「本命は先輩だから絶対に駄目だ。つたく、邪魔しやがって……」
社会が悪いと言う文字を消していると中州が入ってくる。

「おや、携帯電話を取り上げられたのですか？」

「そうだよ、反省文書いてるんだ」

「どれどれ……これならすぐに返ってきてそうですね」

「そっか、お前に言われるとほっとするよ。どっかのアホと違ってな」

「むっ、わたしは別に間違ってるでもないもんっ」

いきなり黒板前に移動し、教壇を両手で叩いた。

「皆の者っ、携帯電話を別に授業中に扱ったぐらいで取り上げられるこんな校則、我々の手で買えようではないか」

「ん、何だ何だ？」

「また田畑のアホが騒ぎだしたようだな」

クラスメートからもアホ扱いとは……可哀想な奴だ。

いつものように騒いで終わりだろうかと思っただらそうでもないよ
うでみんな田畑の言葉に耳を貸していた。

「そうだよなあ、確かにおかしいもんな」

「別に休憩時間とかちよつと触ってもいいよなあ」

「この学校に革命を、わたしとともに、みんなで起こそうじゃあな
いかっ」

「おー」

「ありがとう、ありがとう」
ざいます。田畑焰はみんなの住みよい

学校へ変えようと思っています」

「いいぞ〜」

「もつとやれ〜」

盛り上がっている中、俺の反省文は何とか完成した。アホに構っていないくてよかったからかもしれないし、中州がアドバイスしてくれたからかもしれない。そして、とある声が発せられたところでの集会は一気に静まり返った。

「ちょっと、何の騒ぎ？」

クラス委員長である中原美奈子の声だった。俺に対しては優しいが、こういったことに関しては厳しい。教師から『このクラスは静かで、教えやすい』と言われるのも全てこの中原美奈子のおかげなのだ。きつといなかつたら暴れん坊クラスの名をほしいままにしていた事だろう。

「お腹が急に痛くなったでござる。急性お腹Pごろろでござるよ」
「おお、お主もか。拙者もでござる。なかなかきわどい状態でござる」

「では共に参ろうか？」

「拙者もついて行くでござる」

「では皆で厠に参ろうか？」

「そうするでござる」

男子のほとんどが中原さんに睨まれながら出て行ってしまつ。

「田畑さん、こういう事はあまりしない方がいいよ」

「え〜なんで？」

「いずれ休憩時間だけじゃなく、授業中に使う生徒が必ず出るわ。だから駄目」

「ちえ〜、校則変えたら新戸が喜ぶと思つただけだな」

「それはなんでそう思つのかな？」

「新戸、携帯取り上げられちゃったんだよ」

田畑がそう言つと話をやめてこつちにやってくる。

「風太郎君が田畑さんにそういつたの？」

「え？何が？」

中原さんの手が動いたのも一瞬、そして俺の頬がいい音たてて突っ張られたのは一瞬の出来事だった。

「ちょ、ちょっと新戸に何するのっ」

田畑が食ってかかるけど、あっさりと押しつけられて『あゝれ』とか言いながら飛ばされていった。

「…風太郎君、あたしは普通の学校生活を送りたいのっ、その邪魔をしないで」

すっごい迫力である。逆らったらすーっと持ち上げられて爆破されそうだった。

「え、あ、ああ…悪かった」

「わかってくれたのならいいよ。許してあげる」

中州なんていつの間にか隅っこの方に逃げておびえているし、他の女子もびっくりしているようだった。

中原さんはそのまま鞆を持って自分の席に着席。いやーな空気が流れ始めたので俺は教室を出ることにした。

「新戸おゝじつによき響きでござる」

「イライラがすかつと消えたでござるよ」

「新戸のおかげでござる」

「いぢるいぢる」

「いや、俺がぶたれたんだが？」

「ぶたれるのは誰でもよかつたでござる」

「どつでござるか？彼女にぶたれた感じは？」

何だこの御座る口調は？

「あのなあ、あの一撃は迷いのひとかけらもなかっただろっ？」

「確かに痛快でござった」

「そうでござろう？つまり、拙者の事よりも校則の方が大切と言うのがありありと言つこととでござる」

「その通りでござるな。つまり、貴殿は彼氏ではなく、校則の方が彼氏と言う事で間違つておらぬということとでござるか」

「その通りでござる。つまりは、中原美奈子殿と拙者の間柄は不良に切れるクラス委員長という構図だったと言つわけとでござるよ」

まずは外堀から埋めて行く事としよう。俺と中原さんの仲をなかつたことにするには少々時間がかかるかもしれないがこういった偶然を積み重ねて行つてゴールに向かうしかない。

意外と早い段階で無かつた事に出来るかもしれないと思つた俺は浅はかだつたのかもしれない。

俺がぶたれたその日の一時間目休み時間。俺は中原さんに連れだされていた。

彼女は泣いていた。

「本当、本当にごめん。風太郎君の事をぶとうなんて思わなかつたんだ。でも、あたし、クラス委員長だからクラスの皆のために率先して悪い事をしようとしている人を止めないといけないから…だから、だから…怒らないで？」

うわー、どうするよこれ。すつごく面倒なことになつたんじゃないのかしら？

「は、はは、別に怒つてないから気にしなくていいよ。じゃ、俺、教室に戻るから」

逃げようとした俺の腕を掴む。まだ何か言いたい事があるらしい。

「今度はどうしたの？」

「お願いだから、他のみんなに変な事を言わないで、もう、ぐずつ…あまり友達もできなくて風太郎君に嫌われたらあたし、どうすればいいの…」

「あ、うん、ご、ごめんねえ」

まさか男子との会話が聞かれていたとは…いや、声高らかに最後の方は『よきにはからえ、がははは』ってやってたからな。そりゃ

誰でも聞こえるか。

「……そういえば、風太郎君に昨日の夜電話したんだ」

「え？」

「そうしたら生徒会長が出て、びっくりしたよ。驚いてきつちゃって…本当に、びっくりしたよ…あ、ごめん、ネクタイ曲がっちゃったね」

別にネクタイは曲がっていなかった。だけど、中原さんはそれを正してくれて……ちよっときつめに絞めてくれた

「あ、ごめん、つい力がこもっちゃって」

「あ、いいよいいよ…」

「じゃ、あたしもう行くね」

すぐさま笑顔になって行ってしまった中原さん。なんとなく、嘘泣きしていたんじゃないかと思ってしまった。

第十話：別れるための第一歩

第十話

プールの底が綺麗に見えるのも数週間程度だろう。再びプール掃除がやってくるんだろうが、この苦勞はあまり知られていないらしい。

今年初めての授業での水泳。スクール水着に各々着替え、男子は女子側の方をちらちらと見たりする。

「どう？どう？わたしって魅力的？」

男子の中に女子が一人まぎれているだけだな。誰も田畑の事は見ておらず、先生が来ていない間に見ているようであった。

「これぞ夏でござるな」

「そうでござる」

また御座る共が沸いていた。

沸いた侍ども（もしくは忍者か？）を無視して俺は一生懸命無駄なポーズをしている田畑の肩に手を置いてため息をついた。

「……田畑君、私は実に残念だ。何せ、君に無慈悲な言葉を投げかけねばならないのだから。ああ、誤解しないでほしいのだが、これは決して君の事が憎いとか、嫌いだとかそういう感情一切ぬきの真摯な言葉だから受け止めてほしい。残念な身体だ。うん……いたあつ、なんで殴るんだよっ」

「そこは嘘でもいいから『あゝはいはい、すごく魅力的な身体だよ』っていつてくれればいいじゃん。逆に傷つくよっ」

投げやりでもいいのなら始めっからそう答えてやればよかった。

「でもまあ、僕から見ても残念……ぐはっ」

「中州君ってばいつの間にも新戸っぽい思考回路になったのかな」

フェンスに中州を押しつけてぐりぐりやっている。可哀想に……

中州、俺の為に犠牲になってくれてありがとう。君の尊い自己犠牲は一分程度俺の脳みそに書き込んでおくよ。

「風太郎君っ」

馬鹿を眺めていたら声をかけられた。後ろに控える男子生徒どもが感嘆のため息をもらしていた。

「はいはいどうしたの？」

俺の目の前には中原さんがいた。当然、水着姿だ。それなりのプロポーション（俺の基準が副生徒会長の為に世間一般的にはかなり大きい方だと思う）で、実に健康的だった。

「ど、どうかな？水着、似合ってる？」

スクール水着に似合う、似合わないなんて存在しないと思うんだ。

「あー、似合う似合う、すっごく似合ってるよ」

「そっか、よかったあ…じゃ、またあとでね」

「はい、またあとでねっ」

「ばいばい」

田畑も何故か手を振っていた。男子と女子は別に授業を受けるんだけどな。

「ほら、お前ら集まれ、授業を始めるぞっ」

先生も何か言ってるやってくれればいいのに一切触れない。

「じゃ、お手本は田畑がやってくれ」

「了解ですっ」

そして、お手本を田畑にやらせるとは……。

俺はある程度泳いでからプールに上がり、先生に言う事にした。

「あの〜先生」

「どうした？足でもつったのか？」

「いや、なんで田畑がこっちにいるんですか？」

「それは授業を受ける為だろう。それ以外に何かあるんだ？」

「あ、いや、そうじゃなくて…女子はあっちでやっているじゃないですか」

そう言つと俺の肩を先生が力強く握った。

「いいか、新戸」

「はい？」

「男女差別はよくないぞ。今は平等の時代だからな。田畑はお前と仲がいいし、スポーツは全体的に得意だ。うん、お前よりな」

「何気にひどいっすね」

「そう怒るな。人間には得手不得手と言うものがあるんだよ。そんな十人十色の友達と一緒に汗を流す、これこそまさに青春じゃあないか。さあ、一緒に汗をかこうっ」

もはや何を言っても無駄のようだ。俺は大人しくクロールの列に加わることにした。

最初と言う事もあってか基本的に自由のようだった。先生はプールサイドで腕立てをしているし、泳ぐのに疲れた連中は先生の近くで腕立てするふりをして女子のほうをちらちらと見ている。

「はあ……」

俺はプールサイドの淵に座り込んでぼーっと水面を眺めていた。

「元気ないねえ」

田畑が寄ってきて俺のすぐ隣に座る。中州もおまけで付いてきたようだが、他の男子生徒につかまってプールの中に放り込まれて遊ばれている。

「どうかしたの？まさかばれたとか？」

「いや、ばれてもないけどさ……っーか、別にそっちの話で疲れてるわけじゃないって」

「へえー、てつきりそれだと思ったよ。他に悩み事なんてなさそうだし」

「まあ、悔しいけどそうだな。これからどうしようかなって思っただよ」

「え、何が？」

頭の中で簡単に説明できるようまとめる。もちろん、他の連中に聞かれない様に注意して話すことにしている。

「…波風立たせることなく終わらせたいんだよ」

「ん〜それは虫がよすぎるだろうけどね。でもさ、それを成し遂げたいのならわたし、協力するよ？」

「ん、ああ……ありがとう」

「というわけで、まずは相手の事を知ることから始めたほうがいいんじゃないのかな？」

「開いての事を知るか。なるほどな」

「田畑、中州が足ついたらしいから保健室に連れて行ってやってくれ」

先生の危機感の薄い声が聞こえてくる。どうもプールサイドでいきなり足をついたらしい。

「はいはい。じゃ、わたしいくね」

「ああ」

相手の事を知る事から始めるか……。

女子の方へと視線を移すと気のせいかな、中原さんと目があつた……
……やっぱり気のせいかな。

第十話：別れるための第一歩（後書き）

別に記念すべきってわけじゃありませんが十話目です。この小説、書いててハッピーエンド出来そうにないんですけどどうしたらいいんでしょうねえ。文字打ってて頭の中で勝手に話が進むのですがどうもちょっと暗い話になりそうで怖い怖い。読んで後悔した小説第一位でも目指しますかね。

第十一話：見られている気がするだけ

第十一話

天気予報じゃ雨が降るなんて言わなかったはずだ。おかげで傘を持って行っておらず、帰りはひどく濡れてしまった。相合傘をしてくれる相手はいるにはいる……ま、先輩は生徒会で遅くなるし、結構早い段階で分かれ道に来てしまうからあまり意味がない。

中原さんも用事があるようで何も言っていない俺に謝りに来た。朝に真っ赤な目立つ傘を持ってきていたのは既に確認済みである。

一応、田畑と帰りが一緒になったから恥を忍んでお願いしたところ「しょうがないなあ〜けど、新戸のお願いだからねえ」
等といいつつも傘を広げてくれた。

開いた瞬間、田畑の傘の上部分はすぽんと取れて風にあおられ飛んで行ってしまったのだ。

「……あ、相合傘する？」

「その銀のステッキじゃ出来んだろ」

「新戸、青春って言うものは雨に打たれるのが最高なんだよっ」

「お前の頭が雨に打たれてよくなるといいな」

後日、飛んで行った傘の上部分がお地藏さんの頭の上に無事着陸しているのはまた別の話である。

田畑と共に文句を言いつつ俺は家に帰りついたらと言っわけだ。当然、家に帰りついたらお風呂に入ることにする。シャワーでもよかつたんだけど、やっぱり全身濡れちゃうからな。少し冷えた身体を温めたいわけよ。

風呂から上がってパンツを装着。そのまま自室へと行こうとしたら愛夏がいた。

「お、来てたのか？」

「うん、今日お母さん達帰ってくるの結構遅いし、雨でぬれちゃったからシャワー借りようと思ってさ」

「そうかそうか、風呂という選択肢もあるからな」

「うん、わかった」

一応愛夏の部屋のようなものもある為に着替えに関しては問題ない。その点に関しては問題ないけど、パンツ一丁の男を見て何とも言わないのは問題があると思う。

脱衣所へと向かう愛夏を呼び止め、少しばかり説教する事にした。服は着たのかって？パンツは立派な服だから大丈夫だろ。

「愛夏、ちょっとそこに座りなさい」

「何？濡れてるんだから早くしてね」

「ああ。愛夏、お前もお年頃の女の子だ。親戚とはいえ、俺のパンツ一丁の姿を見て少しくらいは騒いだほうがいいぞ。高校生の頃から達観した態度はいかなもんかと思うんだ」

「じゃあ兄貴、パンツ脱いでよ。さすがに脱いだら騒ぐからさ」

待て、なんで右手に携帯電話をカメラモードで待機してるんだ？そしてなんで笑ってるんだよっ。

「じゃ、愛夏はお風呂に入ってくるからね。あ、そうそう……」

言い忘れていたと言わんばかりの態度だった。

「……やっぱり、愛夏から言わせてもらえば別れたほうがいいと思うよ」

「そうか」

「うん、それと……」

歯切れが悪いと言うか、何と言うか……去り際に残したのは実に信じがたい言葉だった。

「出来れば、生徒会長とも……」

ただ、この言葉は微妙に聞きとれなかった為にもしかしたら『出来れば Saint And Kind』と愛夏がいった恐れもある。意味なんてわからんけどな。

愛夏があがってくるまで暇だったので携帯電話が光っていたのでメールの相手をする事にした。登録した事のないようなところからのメルマガや『二十七歳の人妻ですが……』なんてメールが多量に

来るために迷惑メール対策を一応はしている。

今回のメールをしてきていたのは中原さん。内容は…

「……………お風呂どうだった？……………か」

あの人、俺の私生活でも覗けてるんじゃないだろうか。いやいや、そんな事はないだろうからな。雨降っていたし、こりや家に帰ってお風呂に入ろうかしらとか言っていたからそれで予想しただけだろ。

中原さんに『うん、よかったよ』と送ったところすぐに返信が…
『そっか、いいね。あたしも入りに行こうかな。ところで、今あたしは“何”をしているでしょう？』

そんな内容のものだった。

何をしているのか？息してるじゃないの……………なんて送ったら馬鹿にされるか。真面目に考えたっていい答えは思い浮かばないので、中原さんのメールをまねることにした。

「シャワーを浴びている……………で、いいか」
メールが一分程度で返ってくる。

『正確にはシャワーを浴びながら……………してる。また学校で』
「何してるんだろ」

結局詳しい事は謎のまま。

「兄貴、あがったよ」

「おう……………って、こら、なんで下着姿で出てくるんだよ？」

「未だパンツ一丁の兄貴が言っても説得力無いよ」

「俺はいいの。ほら、服を着せてあげるからこっちに来なさいっ」

愛夏に服を着せ、その後は制服の乾燥を行った。お風呂に入る前に愛夏が言っていた事を聞いてみたけど教えてくれず、メールの事もあって変に想像してしまう。ほんの少しだけ中原さんがどういった人間か知りたくなった。いや、表面じゃなくて裏の方ね。怒ったりしたら素の顔が出るだろうし……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4875x/>

チャック全開ですよ

2011年10月21日09時15分発行